

第一次大戦、現代の起点に

⑧ 小関隆

(イギリス・アイルランド近現代史)

京大人文研 90年の学知

2007年から15年まで、人文研では第1次世界大戦の共同研究が取り組まれたが、その一環として、2010年春に戦跡の現地調査を行った。特に印象的だったのが、ベルギーのランゲマルクに置かれた敗戦国ドイツの戦争墓地である。ほど近い場所にある戦勝国イギリスの広大なティン・コット戦争墓地がいかにも壮麗なに対し、ごんまりとしたランゲマルク墓地はひっそりと身を隠すかのよう。オークの木立に包まれていた。ここに漂うのは仰々しい英雄的死の賛美ではなく、静かな哀悼のトーンである。

ところが、ランゲマルクの名は英雄的死のイメージとともに広く知られている。なぜか？ 1914年11月、敵軍の機関銃掃射を受けた多数のドイツ兵がこの地で死傷したが、ドイツ軍当局は、十代の学生の志願兵たちがドイツ国歌を歌いながら怖れも知らずに突撃した、と公式発表



ランゲマルク戦争墓地。4万4000人超の戦死者が葬られている。森本淳生氏撮影



ティン・コット戦争墓地。ランゲマルクより大規模だが、埋葬者は1万2000人に満たない。筆者撮影

し、この「若者の崇高な自己犠牲」の語りがドイツ国民の心をつかんだためである。学生は死傷者のほんの一部にすぎず、国歌を歌った云々も眉唾ものであるにもかかわらず、敗北を勇敢な若者の美談に仕立て直す神話のおかげで、ランゲマルクは愛国的ヒロイズムの聖地となった。そして、この神話を利用した一人が自分も第1次大戦で同じような経験をしたときりに吹聴したヒトラーであって、ナチスの青少年組織ヒトラー・ユーゲントには、「ランゲマルクの学生たち」の精神を継承し祖国のために死ぬべきことが教え込まれた。ユーゲント師団は戦況が絶望的となった第2次世界大戦末期に戦場に投入され、膨大な犠牲を出す。ランゲマルクはヒトラーを介して二つの大戦を結びつけるのである。

ナチスの言い分では、第1次大戦が終わったのは1918年ではなく1940年、ドイツがベルギーとフランスを制圧した時だった。なんとも勝手な解釈だが、教科書で終戦の年とされる1918年に戦火が消えなかったのは事実である。この年以降の5年間にヨーロッパ各地で次々と勃発した「戦後の戦争」の犠牲者は400万を超える。そして、第1次大戦と「戦後の戦争」の中で先鋭化した紛争こそが第2次大戦を招き、そのうちいくつかは第2次大戦でも解決されないまま後の時代に流れ込んだ。パレスチナ問題や旧ユーゴスラヴィア内戦が端的に示す通



こせき・たかし 1960年東京生まれ。一橋大学社会学博士。京都大学人文科学研究所教授。著書に「プリムローズ・リーグの時代」(岩波書店)「徴兵制と良心的兵役拒否」(人文書院)「アイルランド革命」(岩波書店)など。

領域横断的な分析、不可欠

り、うまく終わり損ねた第1次大戦の爪痕は現代世界にくっきりと刻印されている。

日本で最初の本格的な第1次大戦研究であった人文研のプロジェクトの成果(「現代の起点 第1次世界大戦」全4巻や「レクチャー 第1次世界大戦を考える」シリーズ全12冊)が反響を呼んだ理由の一つは、こうした百余年前と現在との連続性にあるだろう。現代世界の大枠は第1次大戦を通じて形成され、私たちはいわば「ポスト第1次大戦の世紀」を今も生きている。とすれば、現代の諸問題を理解するうえで、1910年代にまでさかのぼる歴史的な見通しをもつことはやはり欠かせない。

同時に、第1次大戦は多様な専門家を擁す人文研に適したテーマでもあった。この戦争が人間の精神のありようまで大転換を促した経験であった以上、軍事的・外交史的な検討だけで事足りるはずはなく、思想史や芸術史の視点が不可欠であるし、グローバルに広がった戦争を考えるためには、ヨーロッパのみならず、アジアやアフリカ、中東やアメリカの専門家も必要であった。領域横断的に研究者が集う共同研究の手法でこそ、第1次大戦の全体像を捉えることができる。共同研究の有効性を改めて知らしめ、昨今の人文研究に「否」を突きつける意味が、人文研の第1次大戦研究にはあったように思われる。(寄稿)